

(題目) 誰もが誰かをねたんでいる  
—小さくて大きい言語学と論理学の狭間—

(氏名) 明日誠一

(所属) 青山学院大学(非常勤講師)

## 1. はじめに

新井(2019)は、(1)の文について、(2)に見るようにコメントしている。

(1) 誰もが、誰かをねたんでいる。

(2) 難しい単語は一つも出てきませんね。そして、これ以上易しくしようがないほど単純な文です。まさに、誰もが理解できるはずの文、でしょう。

実は、言語学の方から眺めると、(1)は決して単純な文ではない。envy の代わりによく引き合いに出される love の例も交えながら、文の「意味」を決定するのは何か、日本語との比較で(1)のような文が言語普遍的に解釈できるのか考えてみたい。

## 2. 言語学では、文の「意味」の決定に情報構造が関与する

言語学では二義的と解釈する文を、論理学では一義的に解釈する傾向がある(-body と -one の差異については、ここでは考慮しない)。

(3) We understand “Everybody loves someone” as meaning that for each person there is someone or other that he or she loves, not as meaning that there is some single person that everyone loves. (Gibson 2004:128)

(4) If for example, we take another look at the sentence *Everyone loves someone*, we notice that in addition to the unmarked wide-scope reading as a many-to-many relationship, there is also a (less likely) many-to-one relationship interpretation exhibiting narrow scope: ‘Every individual loves the same person’. (Meyer 2005:182-183)

同様のことは、Someone is loved by everyone.にも当てはまる。言語学では、この文に( $\forall x \exists y L(x, y)$ )の解釈も認め、二義的として扱う。

(5) (25) Someone is loved by everyone.

is ambiguous: it can be interpreted either with ‘someone’ in the scope of ‘everyone’ or with ‘everyone’ in the scope of ‘someone’. (Bromberger 1992:156)

この違いは、言語学においては、文の「意味」の決定に、論理構造だけでなく、情報構造も関与する、と考えるとうまく説明がつく。

(6) a. Someone is loved by everyone. (ambiguous)

b. Who is loved by everyone? (unambiguous) (Aoun and Li 1993: 67)

(6b)は、「トピックと焦点の組み合わせ」が決まると、言語学の領域では、文の「意味」が一義的に決まることを示唆している。(8a)の普通の解釈は、文末焦点の原則に従う場合、つまり、someone がトピックとなり、everyone は強勢が置かれて焦点となる場合である。この場合、someone が wide scope となる‘ $(\exists y \forall x) L(x, y)$ ’を意味するが、トピックと焦点が入れ替わると、今度は、everyone が wide scope となる‘ $(\forall x \exists y) L(x, y)$ ’を意味すると説明できるだろう(cf. Chierchia and McConnell-Ginet (2000:152))。

love と envy の統語上の振る舞いは、目的語に再帰形(oneself)を許すかどうかだけが違うので、英語の世界では、(1)と(3)の間に同義関係が成立する場合があると考えられる。少なくとも、(1)に対応する英文については、somebody を wide scope の意味で解釈する母語話者が存在する(もっとも、筆者の Hanfling 自身は容認していないが)。

(7) It is said by supporters of Frege that the word ‘somebody’ in such sentences is ambiguous, so that the sentence [=‘Everybody envies somebody’] could mean either ‘Everybody envies somebody or other’ or ‘There is one person who is envied by everybody’.  
(Hanfling 2000: 161)

### 3. 言語学では、「話し手の存在」が存在数量詞の意味解釈に影響を与える

実は、someone が wide scope になる場合、someone は、an NP と同様に、referential であるかのように振舞う。

(8) John didn’t talk to a friend of mine(, namely Bert).

=There is a friend of mine that John didn’t talk to. (McCawley 1998:442)

(9) Everyone loves someone – namely Bob Hope. (McCulloch1989:104)

話し手が特定の指示対象を頭の中に思い描いているので、話し手から見た時には、someone は固有名詞に似た振る舞いをするのである(モダリティの問題と同様、話し手の存在を論理学では考慮しないことが、Everyone loves someone.のような文で、‘ $(\exists y \forall x) L(x, y)$ ’の読みが取りこぼされる一因になっている可能性が考えられる)。

someone が指示的に働くことには、collective の用法が関わっていると考えられる。each と異なり、every(-)や all には、distributive だけでなく、collective の用法がある。

(10) a. {Everyone / All the students} stood up one by one. (distributive)

b. {Everyone / All the students} stood up together. (collective)

集合の個々の成員ではなく、「集合の成員全体」に言及する collective の用法が選択される場合、全員の好みや選択が一致する結果、someone はある特定の人物を指示する機能を獲得すると考えるのである。

### 4. 日本語の壁：「誰か」は someone/somebody の「訳語」として適当なのだろうか？

実は、(1)は Dummett (1981:12)の日本語訳である。Dummett (1981:12) は、 $(\exists y \forall x)$

$E(x, y)$ を意味する表現の一つに(11)を挙げている。

(11) There is somebody whom everybody envies.

応募者の私の耳には、(11)に対応はずの(12)は、非文か、少なくとも、容認度は低い。

(12) 誰からもねたまれる誰かがいる。

そこを措いても、(11)の somebody の場合、対象が話し手の頭の中に明確に存在し、具体的に誰か話し手は名前を挙げるができるのに対して、(12)の「誰か」は話し手が同定できない対象である。「誰か」が果たして存在数量詞なのか再検討が必要かもしれない。

### 参考文献

Aoun, J. and Y. A. Li. 1993. *Syntax of Scope*. Cambridge: The MIT Press.

新井紀子. 2019. 『AI に負けない子どもを育てる』 東京: 東洋経済新聞社.

Bromberger, S. 1992. *On What We Know We Don't Know*. Chicago: University of Chicago Press.

Chierchia, G. and S. McConnell-Ginet. 2000. *Meaning and Grammar*, 2<sup>nd</sup> ed. Cambridge: The MIT Press.

Copleston, F. C. 1950. *History of Philosophy*. Mahwah: Paulist Press.

Dummett, M. 1981. *Frege*, 2<sup>nd</sup> ed. Cambridge: Harvard University Press.

Gensler, H. J. 2010. *Introduction to Logic*, 2<sup>nd</sup> ed. London: Routledge.

Gibson, M. I. 2004. *From Naming to Saying*. Oxford: Blackwell.

Hanfling, O. 2000. *Philosophy and Ordinary Language*. London: Routledge.

McCawley, J. D. 1998. *The Syntactic Phenomena of English*, 2<sup>nd</sup> ed. Chicago: University of Chicago Press.

McCulloch, G. 1989. *The Game of Name*. Oxford: Clarendon Press.

Meyer, P. G. 2005. *Synchronic English Linguistics*, 3<sup>rd</sup> ed. Tübingen: Narr Francke Attempto Verlag.